京都大学人文科学研究所共同研究最終報告書

1. 研究課題

20 世紀作曲家における創作プロセスと語法創造

The Creative Process and Musical Language in 20th Century Composers

2. 研究代表者氏名

浅井　佑太

Asai Yuta

3. 研究期間

2021 年 4 月-2022 年 3 月

4. 研究目的

２０世紀以降の西洋音楽の歩みは、多くの作曲家たちが「独自の＝自分自身の」様式ないし語法の開拓に力を注いだことに特徴づけられる。様式はもはやかつてのような一般的文法ではなく、めいめいが自分自身で自分だけの音楽文法を創造し、それによって作曲するのである。十二音技法（新ウィーン楽派)、引用とパロディ（ストラヴィンスキー)、ハンガリー民謡の芸術音楽への導入（バルトーク）はいずれもこうした例である。メシアンの有名な著作『わが音楽語法』は、すでにタイトルからして、文法の個別化というこの状況をはっきり示している。

本研究はリヒャルト・シュトラウス、マーラー、シェーンベルク、ウェーベルン、バルトークという２０世紀を代表する五人の作曲家を例に、そのスケッチ・自筆譜資料に基づいて、彼らの「創作プロセス（どのようなプロセスで曲を作っていったか)」を「語法創造（いかに自分自身の語法を開拓し、それによって曲が作られたか)」という視点から比較検討し、20 世紀固有の作曲状況に光を当てようとするものである。

The development of Western music since the onset of the 20th century has been characterized by the fact that a number of composers have devoted themselves to creating individual styles and language, each having formulated his “own” musical grammar and composed music accordingly. In this study, we examine sketches of five 20th century composers, Richard Strauss, Mahler, Schoenberg, Webern, and Bartók, in order to discuss the relationship between the artist’s creative process and his unique musical language.

5. 研究成果の概要

班長浅井佑太によるウェーベルンの生成研究の成果が、ドイツにおいて単行本として

出版され、日本音楽学会全国大会（11 月 14 日信州大学）で浅井および同じく班員である伊東信宏がバルトークの批判校訂版をめぐるシンポジウムのパネリストをつとめた。

6. 共同研究会に関連した主な公表実績

なし

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

本年度の研究の総括を 2022 年度の人文研アカデミーにて浅井と副班長の岡田が行う。また成果は人文学報の論文として公表する予定である。